

日

神戸新聞

(第3種郵便物認可)

# 小型ロケット発射に歓声

北海道の町工場で宇宙ロケットなどを開発する「植松電機」(赤平市)社長の植松努さん(57)を招いた特別教室が、姫路市夢前町前之庄の夢前高校であった。1〜3年生の約180人が時速約200キロで飛ぶ小型ロケットを作り、白煙を上げて空高く舞う機体に歓声を上げた。(真鍋 愛)

植松さんは、池井戸潤さんの小説でドラマ化された「下町ロケット」のモデルともいわれる。北海道大学の永田晴紀教授と共同で、火薬を使わないロケット「カムイ」などを開発。教育活動の一環として、講演や本物と同じ原理で飛ぶモデルロケットを作る講座を全国で開催している。

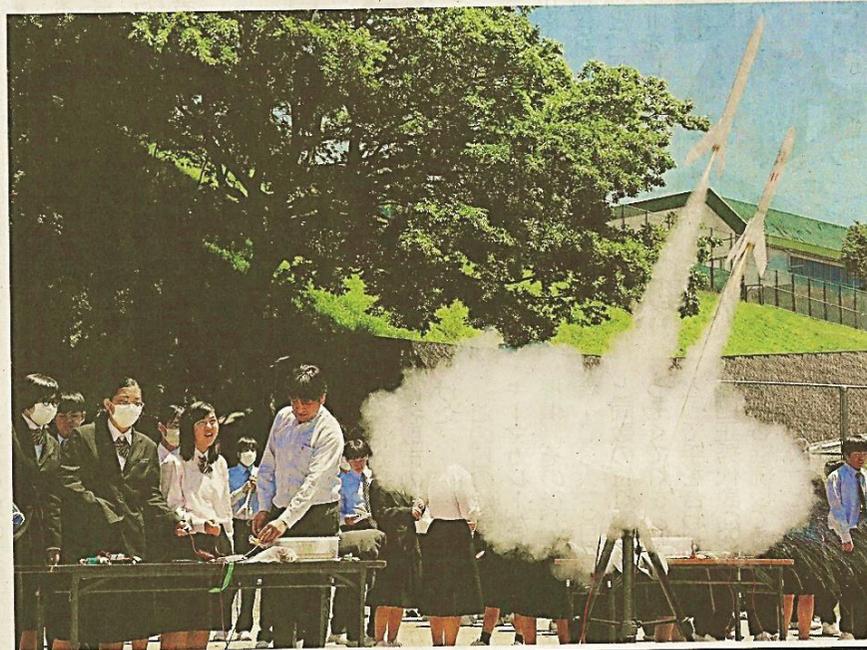
同校での特別教室は創立75周年を記念し、同校や同窓生、保護者らが主催した。前半は植松さんが「思えば招く」と題して講演し、夢を追う大切さを語った。

植松さんは、開発中だったロケットエンジンが爆発する動画を流し、「失敗はデータ。乗り越えたら力になる」と熱弁。時には経験者や有識者に頼りながら挑戦する重要性を説き、「勇気を出して『好き』と『困った』を口にしよう」と生徒に呼びかけた。

講演後、生徒はモデルロケット作りに挑戦。植松さんらに尋ねながら紙とプラスチックの部品を組み立て、仕上げに油性ペンで機体を彩った。

完成したロケットは火薬燃料が込められ、運動場で打ち上げられた。「3、2、1、発射！」のカウントダウンでボタンを押

## 「下町ロケット」モデル・植松さん 夢前高で特別教室



### 紙とプラスチック製

すと、ロケットは火花と白煙を勢いよく出し、一直線に空へ。生徒は、パラシュートが開いてふわふわと落下する機体を笑顔で受け止めた。生徒会長の釜谷璃久さん(17)は「自分が作ったロケットが飛んだ瞬間、達成感があった。夢は探している最中だが、やりたいうことが見つかったら植松さんの言葉を思い出し頑張りたい」と力強く話した。

自分が作ったロケットを飛ばす生徒たち=夢前高校